月潟村、味方村、中之口村三村海外研修事業

山際 るみ子

イタリアの国を訪れて

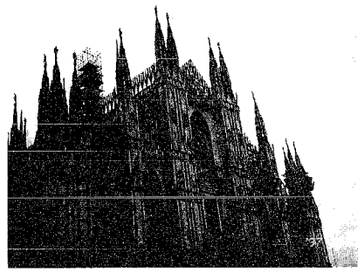
ヨーロッパ各地を訪れた人達が皆イタリアが一番良かったと言うので、イタリアは私の中で興味が膨らんでいた国の一つでした。そんな時に今回の研修旅行があると知って、又とないチャンスと思い、参加させて頂きました。

日本を発つ日は、朝5時20分集合で、成田を昼に出発予定でしたが、飛行機が6時間遅れで、夕方薄暗くなってからの出発になってしまいました。15時間も飛行機に乗り、ローマに着いたのが現地時間で夜中の2時過ぎでしたので、私の疲れはピークに達していました。ところが真夜中のローマの景色がその疲れを吹き飛ばしてくれました。オレンジ色の光で照らし出される緑深く生茂った道沿いの大きな木や、古く重厚な建物。いかにもヨーロッパを思わせる光景でした。その中で時に、ライトアップされた遺跡の建物（コロッセオなど）には、何か神秘的なものを感じ、ただ溜め息が出るばかりでした。そんな興奮のせいか、ホテルでとった睡眠は1時間半でした。

イタリアの私の印象は、石をふんだんに使った彫刻の街だと思いました。建物は至る所に彫刻が施され、柱はもちろん、床までが大理石や石のモザイクとこり、天井は絵が描かれている凝った造りで豪華絢爛でした。それとは裏腹に一体どれだけの月日と資金がかけて造られたのか、と市民の税の苦しみを考えずにはいられないほどでした。道は石畳で、少し歩きにくかったのですが、機能性よりも美しさを重んじる国なんだと、改めてイタリアという国のアート感覚に頭の下がる思いでした。イタリアの人はとても陽気な人が多く、他国の人を受け入れる姿勢ができているので、余計に観光として訪れやすい人気の国なのだと思いました。

1回目の視察は、ローマの一般大学で、ここは日本でいう資格、学歴を取得する大学ではなく、自分のための生涯学習大学でした。生徒数は2万8千人で、自分に合わせてコースを選択して学ぶという形式の様です。その日は偶然かもしれませんが、40才以上の方が多かったのには驚きました。向上心の高い方々に感心し、私も常に何かを学ぼうという姿勢を忘れてはいけないと思いました。

2回目に訪れたのが、ベネツィアの街のゴミ処理施設AMV（アマブ）でした。水の都で、有名な観光地ともあって、ゴミ問題には力を入れているようです。ゴミ分別はもちろん行われ、生ゴミだけを回収する事も最近始めたそうです。私達が見学した工場は、ダンボールなどを燃やして、発電を試みる工場で、これから運営されるとの事でした。ゴミ問題は、日本でも深刻な課題です。ゴミの分別を徹底し、リサイクルできる物はリサイクルに回し、限りある資源を有効に使って行く、という姿勢で環境問題には取り組んでいかなければいけないと思いました。フィレンツェで道路の両端に二個ずつ置かれた、かわいくてしっかりした造りのゴミ箱を見ました。児童が書いたと思われる絵がびっしりと描かれていて、とても目をひくいいアイデアだと思いました。ゴミに対する意識が、子供も大人も高まるような、そんな気がしました。

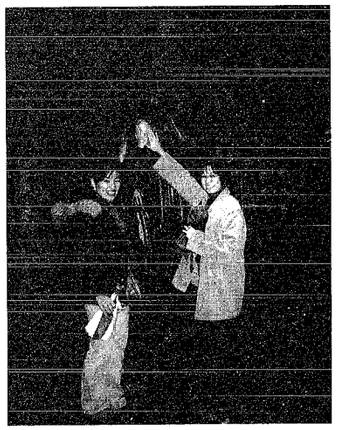


3回目の視察はミラノの市役所を訪れ、老人福祉課の課長を務めている方のお話でした。イタリアでは2世代で住むことが少なく、夫婦は独立して暮らし、日本の様な後継習慣はないそうなので、老後の問題も日本以上に深刻だそうです。ミラノでは、老人ホームが全く足りていない状況なので、住み馴れた環境で暮らすのが一番と考え、教会の協力や市の福祉の人と老人がすぐに連絡を取り、様々な要求に応じられるシステムになっているそうです。また、それよりも問題なのは、老後の心の孤独と言われていました。スポーツやレジャーに力を入れ、心のケアに力を入れているようでした。さすがに宗教国だけあって、精神や心の問題に対する取り組み方が違う印象を受けました。

今回の研修旅行に参加できた事で、普通の観光旅行では味わえないようなイタリアという国に触れられた気がします。とても充実した、満足できる旅行でした。私は月潟に嫁いでまだ日が浅く、地域の方々と接する機会が少ないのですが、今回の研修旅行に参加できたおかげで、月潟の方はもちろん、味方の方や中之口の方とも交流を持てたことが、本当に良かったと思います。みなさん親切な方々ばかりでしたので、楽しい旅行ができました。感謝の気持ちでいっぱいです。

イタリアが一番良かったと言っていた人達の言葉は嘘ではありませんでした。

近藤 八枝子

「ローマの休日」に憧れて

11月2日。朝4時半に目覚ましがなり、とうとうイタリアへ行く朝がやって来ました。前の日の夜まで「ローマの休日」を見ながら、スーツケースを開けたり閉めたり。それでもパッと目覚め、誰に見送られる事もなく、1人スーツケースを引きずり役場へ1番乗り。そして10時には成田に無事到着。と、そこまでは順調でしたが、私達の飛行機がなんと6時間遅れ。2年前香港で救急車に乗った（友人の付き添いでしたが）事を思い出し、「やはり私が行くと何かある。」と確信しました。ローマの空港に着いたのは夜中の2時過ぎ。バスでホテルに迎う途中、所々ライトアップされ幻想的に浮かび上がる遺跡の数々に感激しました。その翌日、最初の視察地であるローマ大学へ行きました。そこでフォロレンツァーロ校長よりこの大学についての概要をお聞きしました。ここでは一生を通して自分を高めるために勉強したいという人のための庶民大学であり、芸術、スポーツ、健康保健、演劇、言語、歴史、一般教養の7つのコースがあり、私達は2班に分かれ、イタリア語の授業とインターネットで大学の情報を発信している部屋を見学してきました。私は実際にイタリア語（とても簡単な会話）を話す事ができて本当に楽しかったです。その中で今も忘れられない言葉が、「Mi chiamo.」（ミ、キアーモ）「私の名前は。」という言葉で、私は「これは使える。イタリア人と話すチャンスがあれば聞かれなくても、取りあえず『ミ、キアーモ、ヤエコ』と自己紹介しよう。」と固く誓ったものの、イタリア人と話す度に舞い上がり、とうとう一度も使う事なく帰国してしまい残念でした。ローマ大学で感じた事は、カルチャースクールの色が強く、「大学」とは付いているが日本でいう「大学」とはかなり違うものだと思いました。次の視察地は水の都ベニズにある「Amav」（ベネチア環境保全機構）へ行って来ました。建物は18世紀の貴族の家を修復したという、フレスコ画の壁画がとても美しい所でした。この組織の活動はゴミ収集が主なのですが、緑の保存保持、下水処理活動、公共墓地や公共施設の清掃も行っているそうです。私が日本と異っていると思った事は、麻薬常習者の集まる所で使用済みの注射器を回収している事。運営費は市民の住宅の面積に応じて徴収しているゴミ税で賄っている事。粗大ゴミ（古タイヤ等）は完全持ち込み制で、重量に応じてクーポン券を渡し、貯った人には何かあげるという事をして粗大ゴミの放置を少しでも防ぎ町の美化に努めている事。そしていずれはゴミの焼却熱を利用して発電も考えているとの事でした。しかし残念ながら日本と同じなのだと思う事がありました。それは粗大ゴミが近年増加しているためにここだけでは管理しきれず、近くの町や村にお金を出して一時預かってもらっているという事です。私にはお金でゴミを押しつけているように思え、どこの国でも都会の犠牲になるのは小さな町や村なのだと思い少し悲しかったです。そして最後の視察地はミラノ市役所の福祉課。老人福祉課長のアンザリさんよりお話をお聞きしました。ミラノ市の人口130万人以上に対してその3割以上の38万人以上が60才以上との事でした。近年では老人ケアの考え方が変わり、以前なら24時間体制で老人ホーム等の施設で面倒をみる形から老人が慣れた環境であある自宅で気持ち良く老後を過ごせるようにケアしてあげるという形へ。91年からは1人暮らしの老人の家にテレソコールソという電話1本で係員がその家に駆けつけるシステムを導入。これは24時間体制で病気内容や親戚の住所までも把握しており、いざという時、すぐに連絡できるそうです。その他色々な老人へのサービスをお聞きしましたが、私が最もイタリアらしいと思ったことがあります。それは老人のためのバカンスツアー。各旅行会社がそのツアー内容を企画しコンクールを行う。そして1位になった企画を考えた旅行会社がこのプロジェクトに参加できるのです。もちろん値段ではなく、いかに老人達が楽しめるコースになっているかが審査基準だとか。参加費は年金に応じて異り、足りない資金は市が援助するそうです。企画がその通り良いものであったかは帰ってきてからの老人のクレームで知る事ができ、市が旅行会社をコントロールできるいい機会でもあるそうです。最低でも一ケ月間バカンスを楽しむイタリアらしい老人サービスだと感心しました。自由行動はあまりなかったですが、関根さんと朝早く起きてトレビの泉へ行ったり、2人で地下鉄に乗ってドウオモへ行き素晴らしいスタンドグラスの中でミサを覗いた事など。1週間のイタリア視察でしたが私の人生で忘れられない貴重な体験ができました。仲良く親切にして下さった参加者の皆さん、心良く出してくれた仕事場の皆さん、そして家族に感謝しています。有難うございました。